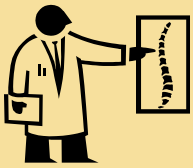


伊藤外科ニュース



89 号

2011.11発行

なでしこジャパン

東京は 11 月になっても暖かい日が続いています。この気候では綺麗な紅葉を見る事はなかなか難しいでしょう。新宿中央公園でも間の抜けた紅葉が少しあるだけで不思議な印象です。

今年は東日本大地震と、その後の津波被害に代表されるように暗いニュースが多い年でした。その中で女子サッカー「なでしこジャパン」の活躍は特筆すべきものでした。

私は準決勝からテレビ観戦しましたが、大きな対戦相手に果敢に立ち向かい、また得点されてもあきらめずプレーする姿は、技術の高さとともに賞賛されるべきと思いました。

最近の日本は、多くの分野で女性の活躍が素晴らしく我々男性も頑張らないといけないと思った次第です。また、「なでしこジャパン」のメンバーのうち数人はワールドカップ優勝後海外へ旅立ち現在活躍中との事、私は更なる元気をもらったようで感謝しています。



風邪のはなし

今回は風邪に関しての話をします。寒くなると流行するいわゆる風邪とはどんな病気でしょうか。

多様なウイルスの感染が原因で、鼻水、咳、発熱などの上気道炎症状を起こした状態を風邪と呼びます。風邪は本来数日間の経過で治る病気で、特効薬はなく安静が大事ですが、咳止めや解熱剤の内服などの対症療法で早期に症状の改善を図ります。

私は、市販の風邪薬を数日間飲んでも改善しない咳やタン、39度前後の高い熱の際には医療機関を受診するように勧めています。理由は、体力低下により合併した気管支炎や肺炎の治療が必要であったり、風邪ではなくインフルエンザや扁桃腺炎、腎盂炎などの可能性があるからです。風邪薬を10日間飲んだが良くならないと来院する方が年間数名いらっしゃいますが、多くは肺炎を起こし緊急入院となります。

もちろん大病した後や喘息などの呼吸器の持病を持っている方は早めに医師の診察を受ける事をお勧めします。

伊藤外科の外来では、ご高齢の方よりも圧倒的に高校生や20代の若い方が風邪をひいて来院されます。やはり規則正しい食事や睡眠の習慣が冬の病気予防にも重要なようです。

いよいよ木枯らしの吹く季節を迎えます。インフルエンザワクチンの予防接種にいらっしゃる方も増えました。これからは町医者の仕事も冬支度になって行きます。皆様も体調管理に気を付けてお過ごしください。



院長



今回の一冊

心の歴史

著者 佐々木 邦

三弓が好んで読んでいた作家に「佐々木邦」がいる。本人の口から何度もこの名を聞いたが、著作を手にとったのは今回が初めてだ。明治 16 (1883) 年生まれ、ユーモア作家の第一人者として昭和 30 年代まで活躍した。イギリス発祥の「ユーモア」は、昭和の時代まで日本人の文化のなかにもあったが、悲しいことに死語になりつつある。佐々木邦は英文学者でもあったが、「おそらくはじめて英語のヒューマー、ユーモアを深く解し、自分の感覚とした日本人であった」(本書解説より)という。

本書は、老境にさしかかり、郷里の庄内に帰臥したひとりの男がその人生を振り返る物語だ。こう書くと、「どこにユーモアが……？」と思うかもしれない。そもそも「ユーモアとはなんぞや」などということを解説する力をワタクシは持たない。が、とつとつと語られる男のこの物語を読みながら、時折、「フフフッ」と声に出して笑ってしまった。まあ、紆余曲折はあるが、文面は静かな物語である。思わず笑ってしまった箇所も、なにがどうおかしかったのか、言葉ではうまく説明ができない。さりげなく自虐的だったりもするが、文章全体に品がある。本書は戦後4年目に書かれたもののようだが、たいへん読みやすいのにも驚いた。そしてなにより、読みながら時折、三弓の書いたものと同じ匂いがするのにはハッとした(もちろん、力量には雲泥の差はあるのだが)。文章は愛読している作家に似るといって、よく聞く現象だけでなく、同じ時代に同じ趣向を持って生きた人たちに共通するなにかがあるのだろう。

「ユーモア」という言葉でもうひとつ思い出すことがある。ワタクシが仕事でよくお世話になる沖縄には、小那覇舞天(おなは・ぶーてん)という漫談家がいた。佐々木邦より少し年下の明治 30 年生まれである。本業は歯科医(沖縄方言ではハージェーク(歯大工)という)。大正期の東京で過ごした学生時代、浅草の芸能にどっぷりハマり、帰京後、どちらが本業かわからぬほど芸人としても活躍した人である。

ブーテンさんについては、戦後の収容所での話が語り継がれている。4人に1人が戦死したといわれる日本唯一の地上戦を体験した沖縄では、戦後、生き残った人たちが収容所に入れられていた。その収容所の家々を、夜な夜な三線引きの子分を連れて尋ねて歩く、鼻の下のチョビ髭に丸めがね姿の男。男は開口いちばん「さあ、みなさん、命のお祝いをしましょう！」といって、キテレツな踊りと歌を始めるのである。家族の誰かは戦死している県民は、これを聞いて当然、「なにが命のお祝いだっ」と怒るが、ブーテンさんはこう言う。「生き残った人が元気でいなければ、死んだ人が浮かばれないよー。だから、命のお祝いをしましょう」——沖縄は芸能が盛んな土地だといわれるが、戦争で命も土地も灰燼に帰したこの島は、ユーモアやウィットなどさまざまな笑いを武器に、自分たちの足で立ち上がってきたのだ。

なんだか無機質な人が増えてギスギスしたい今の世から見ると、ユーモアを解した人たちがいた時代というのは、なんと伸びやかで、力強く見えることだろう。

(一弓)